

ライフデザインと福祉(Well-being)の人類学 : 開かれたケア・交流空間の創出 : 企画趣旨

| | |
|-----|--|
| 著者 | 鈴木 七美 |
| 雑誌名 | ライフデザインと福祉(WELL-BEING)の人類学 : 開かれたケア・交流空間の創出 : 報告書. 「ライフデザインと福祉(Well-being)の人類学」プロジェクト編集. |
| ページ | 9-13 |
| 発行年 | 2009-03-01 |
| URL | http://hdl.handle.net/10502/4550 |

企画趣旨

ライフデザインと福祉(Well-being)の人類学 - 開かれたケア・交流空間の創出 -

国立民族学博物館 鈴木 七美

社会の少子高齢化という現状認識のもと、援助を必要とする人々への支援の基盤となる財源や人材の確保をはじめとして、ケアや介護への関心が益々高まっている。国民国家の枠組みのもとに進められてきた福祉国家の諸制度は社会を基盤とするという観点から、福祉社会について考察を深め、援助技術に留まらずそれらが実践される状況に注目し、ケアされる側の声を生かそうとする視点も示され、様々な領域の研究が進められている¹⁾。

とはいえ普遍的現実としての老化や、ライフステージにおいて様々な状況を経験する人々の日常を考えるならば、気遣い、配慮、関係性を紡ぐという意味でのケアはすべての人々に関係する事からである。こうした意味のケアを考えるにあたり、「ウェルビーイング well-being」(よき生活・幸福・安寧)や生活の質(QOL)を検討する視点が不可欠である²⁾。グローバル化、多文化化が進む現代社会において、コミュニティや生活者のウェルビーイングとその実現に向けた対話や調整のアートの練磨は、フィールドワークに基づく文化人類学研究はもちろん、他領域の研究や現場における実践者の経験を動員し、共同的に取り組むべき重要課題として浮上している。

そもそもウェルビーイングは、14世紀以来「善き生 good living」を意味する語として使われていたものであり、人や共同体や事物がよく快適な状態を表すものであった。それは、原義においては「弱者」や「非理性」を例外とする周縁性への配慮に留まるものではない。後に私たちに「福祉国家(welfare state)」とともに馴染み深くなる"welfare"は、ともすれば多分に「慈恵的」「慈善的」なイメージで、一部の「弱者」「非理性」とされた人々のみを対象とするように受け止められ、17・18世紀の〈ポリス〉(福祉行政)を経る中で、教育・治療・治安・福祉などに関し専門職化したサービスを一方的に与える"welfare"が頻繁に使用されるようになった³⁾。

1946年のWHOの世界保健機構憲章草案の中に、病気に罹患していないという意味に留まらない「良好な状態」として、「健康」を定義する上で明確に意味付けされた「ウェルビーイング」という言葉が登場し、すべての人々が日常生活の中で求めていくという意味での「良好な状態」として注目されるようになった。ただ、1994年に「子どもの権利に関する条約 Convention on the Rights of the Child」が日本において批准された際、「ウェルビーイング Well-Being」が「福祉 welfare」と訳されたことにみられるように⁴⁾、この言葉は、人々が考える自分の望みやライフスタイルを生かしていくというよりも、まずは環境を整備し援助を与えることに集中するという印象を与える傾向がみられる。

しかしながら、ウェルビーイングの実現は、全ての人々に共通に必須の生のスタイルとして追及されるものである。そのためには、一人一人が自らの「ウェルビーイング」に思いを馳せ、表現することが出発点となる。それらをライフデザインとして実現させていくにあたっては、専門家のみならず、全ての人々が、願いや希望の多様性を探り、その実現に必要な要素を見出していくこと、すなわち、人々が思いを発信する機会を確保し、希望を調整する協働的活動に参加して

いくことが不可欠である。

ここでは「ウェルフェア welfare」と共に「福祉」と訳されてきた「ウェルビーイング」という語に注目し、一方的な支援に留まらない新たな関係性にかかれた重層的な活動としての「福祉」の様相について考える。その際、ケアの場として設けられてきた学校や高齢者の生活の場など、国内外の具体的な空間に注目する。近代化過程において、人々の活動やその場は専門的知識に基づき整備される傾向がみられたが、年代や状況によって固定化された暮らし方を問い直すことは、その手がかりを与えられると思われる。本フォーラムでは、オルタナティブとして行われてきた実践の数々に触れることで、人々のウェルビーイングを構成する要素を問い直し、それを実現する活動の工夫が、変化する状況に対応しつつ多様な活動拠点にかかれた場を創出する展開について検討する。

鈴木は、薬学系有機合成化学を基盤とした薬剤の合成及びその薬剤を経口投与が難しい患者へも適用可能とする経皮吸収可能な新規機能性材料の開発研究という仕事に従事していた過程で、患者も含めケアの場に関わる人々の情報やパワーを共に生かすことに興味を抱くようになった。その後、出産や医療の近代化に疑問を抱き「ふつうの人々」の癒しのありようを問い直した 19 世紀アメリカの民衆健康運動や現代の代替医療（オルタナティブ・メディシン）というテーマを追い、オルタナティブという視点から、アメリカで現代文明の適用を制限し高等教育を否定するキリスト教再洗礼派アーミッシュのライフスタイルや、新生殖補助技術や国際養子縁組など家族の多様性と関連する実践をとりあげてきた³⁾。それらを通して、幸福や豊かさの捉え方に基づく働き方や教育実践の多様性に思い至ると共に、それらに基づく要素を抽出、解析した結果として、施設やスペースが工夫されている事例にも出会うことができた。そして、若い世代から高齢の世代まで、それぞれの土地に根ざした生活に触れることにより、人々のウェルビーイング観を構成する要素やライフデザインのありようについて考えるようになった。

このような観点から、国立民族学博物館機関研究プロジェクト「ライフデザインと福祉 (Well-being) の人類学—多機能空間の創出と持続的活用の研究」を立ち上げ、文化人類学はもとより社会学・教育学などの研究者や実践に関わるメンバーと共同研究を続けてきた。今回それらの過程と研究成果を一般公開し、議論を深める目的で国際研究フォーラム「ライフデザインと福祉 (Well-being) の人類学—開かれたケア・交流空間の創出」を企画した。以下に各セッションの概要を示す。

セッション I 人にやさしい社会の創生に向けて - 大学からの情報発信と人材育成 -

本セッションでは、多機能空間としての大学について検討する。大学が支援活動の拠点として、弱者や被災者のみならず、人々のニーズやアクセシビリティに関する情報が次第に蓄積され、重層的かつ継続的に活用されていく経緯を報告する。人々のニーズとして提示された多様なケアは、すべての人々のアクセシビリティに関しアイデアを出す企画・立案へと展開し、教育を通して拠点がコミュニティに開き繋がってゆく過程を検討する。

1. 「大学アクセシビリティセンターにおける活動の展開」では、日本初の大学アクセシビリティセンターにおいて、特定の学生に対する支援に留まらず、情報交換や教育の中核としてセンターが重層化してきた様相を報告する。
2. 「被災から復興におけるボランティア活動の変化—震災資料収集と情報発信を中心に」では、阪神・淡路大震災後の「震災資料」を収集、保存、一般公開しようとする「震災

文庫」の立ち上げや、ボランティア活動が資料収集や新たな情報発信の場を継続的に形成していく経緯を報告する。

セッションII 多文化社会における高齢者のクオリティ・オブ・ライフ

本セッションでは、多機能空間としての高齢者対象施設について検討する。

カナダでは、エスニシティや宗教に基づく高齢者集合住居や施設が数多く創設されているが、これら施設の特徴の一つは、多文化主義のもとでまわりのコミュニティにも開かれることである。閉鎖的になりがちなエスニック高齢者集合住居において、外部との交流や異なる文化的背景の人々の入居が可能となるよう行われてきた、日系および中国系の施設を拠点とした協働の試みに注目する⁹⁾。施設協働のプログラムが、エスニシティや世代により文化的背景の異なる人々にいかに活用され、これらの施設が町やコミュニティにどのように位置付けられてきたのかを考察する。

1. 「多文化主義カナダの高齢者集合住居とアウトリーチ」では、多文化都市トロントで、中国系高齢者施設をはじめ四施設と協力して実施している、日系高齢者対象のアウトリーチプログラムの開発経緯、「アウトリーチ・コーディネーター」の役割について報告する⁷⁾。
2. 「中国系老人総合施設イーホンセンターにおける継続的ケアと文化的背景への配慮」では、日系高齢者施設のアウトリーチ活動と協働し、開放的な施設で高齢者が充足して暮らせるように、「異文化」をアクティビティや食事に取り入れることにより、コミュニケーションを図ってきた経緯を報告する。

セッションIII 高齢者のウェルビーイングから地域コミュニティのデザインへ

本セッションでは、高齢者が求める多様なウェルビーイングとその展開を検討する。

1. 「産業型福祉—高齢者を担い手とする産業の創出と町のデザイン」では、過疎化・高齢化が進行する徳島県上勝町において、地域に適合的な産業の振興を推進し、その結果として「産業型福祉」を果たした町として広く知られるようになった経緯について報告する。

高齢者のウェルビーイングを構成する要素の一つとしての「仕事」を十分に行えるように工夫された支援の数々が、高齢者のみならずコミュニティの他の年代の人々の交流状況や生活を変化させ、移住者も共に当事者として協働し、地域コミュニティを変化させてゆく可能性⁸⁾について議論を深める。

2. 「ケベック州モントリオール市におけるマギル大学の高齢者学習グループの展開」では、大学に集合し仲間とともに学ぶプログラムを自ら編み出す高齢者の活動について報告する。カナダのマギル大学の一部として展開してきた高齢者の継続学習プログラムは、「自分たちでデザインし、お互いから学ぶ」(Peer design and Peer learning)をモットーに、会員の自治によるボランティア活動として運営されている。学習グループ、講演会、校外探索などの実例を紹介し、やってみたかったことを仲間と追及する高齢者のウェルビーイングと大学の役割について考察する。

セッションIV 技術と障害者から始まるコミュニティ・デザイン

本セッションでは、双方向的ケアを可能とするシステム開発の現場に集う人々の活動について検討する。支援を必要とする人々の声を生かし、適格的な技術を構想する作業を、障害をもつ人々、学生、研究者が協同で行ってきた経緯を報告する。暮らしの場のウェルビーイングに関わる具体的なモノや方法の開発に関わる学生たちの学外活動が、街作りに繋がる交流を生み出していく状況について議論する。

1. 「スペース ALS-D - 介護×ダンス×建築 -」では、重度 ALS 患者の独居(dokkyo) 生活の場と舞踏 (dance) スタジオを融合した「スペース ALS-D」を拠点とする活動について報告する。患者自ら介護事業を展開する「さくらモデル」の展開やダンスイベントの開催など、地域に密着した暮らしのデザインに関し議論する。
2. 「難病患者の遠隔地間対面コミュニケーションと技術ピアサポート」では、「生存学」創成拠点の ALS-IT プロジェクトの展開を報告する。ALS 患者と協働し開発する遠隔地間の対面コミュニケーションが、患者と周囲の人々との関係にもたらす効果を検討する。
3. 「重度重複障害者の日中活動と工学部学生の福祉ものづくり」では、地域に根ざした重度重複障害者施設「訪問の家 朋」を拠点として、湘南工科大学のサービ斯拉ーニング「障害者支援モノづくり」の授業に参加する学生と障害者が、使う人の視点からモノづくりの協働作業を進め、地域に新たな価値を創出する過程を報告する。

セッションV オルタナティブ教育とライフデザイン

本セッションでは、ウェルビーイングの把握と「教育」の意味を検討する。

1. 『「試験のない学校」ーデンマークのフォルケホイスコーレに集う人々』では、幸福度世界一ともいわれる社会福祉国家デンマークにおいて、大きな役割を果たしているとされるフォルケホイスコーレ（国民高等学校）について報告する。
誰もが、立ち止まって考え学ぶことができる場とされるデンマークの特徴的な民衆学校フォルケホイスコーレは、試験や資格とは無縁であり、教師と学生が共に暮らし対話する場である⁹⁾。「生の学校」とよばれるフォルケホイスコーレを創始した哲学者・詩人グルントヴィが生きた時代背景や、今日のデンマークの教育の柱となっている事がら、すなわち人々のウェルビーイングやコミュニティに関する考え方とそれを実現するためのアプローチとしての教育について検討する。
2. 「オルタナティブ教育と時のデザインー現代アメリカにおけるアーミッシュという生き方」では、高等教育を否定するアーミッシュの親たちが自ら手作りするワンルーム・スクールを重視する、オルタナティブ教育の実践について報告する¹⁰⁾。最近注目されている、アメリカにおけるホームスクールの考え方をも紹介しながら、アーミッシュの人々のウェルビーイングと教育の意味を考える。

以上、ライフサイクルにおける多様な時の過ごし方を可能とする空間の可能性についての報告と議論を通して、特に以下の点を検討する。

1. いかなる状態で何処にいても人々が囲いこまれることなく交流できる方法を開発することが、一方向的ではないケアの空間を確保することに繋がるのではないか。
2. 様々な活動に開かれるケア空間は、人々に交流の機会を提供するだけでなく、変化に対応しながら新しい企画を練る基点となって、より広いコミュニティにおける持続的共

生を可能とする一要素を構成するのではないか。

3. 上記のケア空間ひいてはコミュニティ構想にあたっては、専門職者とは限らない、すべての「ふつうの人々」が自らの「ウェルビーイング」に思いを馳せ、声を発し、議論・調整に参加することが出発点となろうが、これを可能とする人材やシステムはどのように構想しうるか。

最後に、本シンポジウムで得られた知見をもとに、ケア空間の創出とその柔軟な持続的活用に関する基盤的研究と応用的研究を深化させ、実践・研究の場に関わる人々のさらなる協働に繋げていく所存である。

注

- 1) たとえば、佐口和郎・中川清編著『福祉社会の歴史』ミネルヴァ書房、2005年、上野千鶴子他編『ケアされること』岩波書店、2008年、Edgar, I.R. & Russell, A., *The Anthropology of Welfare*, Routledge, 1998 など。
- 2) 『「少子化社会におけるライフデザインの実践と議論に関する文化比較の医療歴史人類学研究』平成17年度科学研究費補助金基盤研究C〔課題番号：17520563〕（研究代表者：鈴木七美）研究成果報告書、2008年；Suzuk Nanami, “Creating a New Life through Persimmon Leaves: The Art of Searching for Life-design for Greater Well-being in a Depopulated Town”, *Working Paper G-GOE*, Kyoto University, 2009（刊行予定）。
- 3) 寺崎弘昭「福祉・教育・治安」『教育の制度と社会』2000年、37-38；42-43頁。
- 4) 畠中宗一・木村直子『子どものウェルビーイングと家族』2006年、17、19頁。
- 5) 鈴木七美「新生殖技術への対応と家族-スイス・フランスの議論を中心に」『生殖革命と親・子』早稲田大学出版部、2008年；『新しい家族』を求めて-デンマーク・フランス・スイスの国際養子縁組の現状-」平成17年度科学研究補助金（海外学術調査）基盤研究(A)『新生殖医療に起因する国境を越えた社会・文化的諸問題の実証的研究』（研究代表者上杉富之）による調査報告書、2009年など。
- 6) Suzuki Nanami, “An Attempt to Establish a New Home for Elderly Japanese Canadians and Nikkei Groups in Toronto: Towards the Development of a New Culture through Weaving Various Relationships around the Aged”；「トロントの日系高齢者施設における試み - 広がる高齢者の活動と新しい文化創造」『少子化社会におけるライフデザインの実践と議論に関する文化比較の医療歴史人類学研究』2008年。
- 7) 傳法清「ある移住者家族の体験から」鈴木七美編『少子化社会におけるライフデザインの実践と議論に関する文化比較の医療歴史人類学研究』2008年。
- 8) 横石知二『そうだ、葉っぱを売ろう』ソフトバンククリエイティブ、2007年；鈴木七美「柿の葉を摘む暮らし - ノーマライゼーションを超えて - 」『文化人類学』70-3、2005年。
- 9) 鈴木七美「デンマークの福祉における余暇の思想」『人間学研究』7号、2007年。
- 10) 鈴木七美「キリスト教非暴力・平和主義の底流 - 再洗礼派メノナイト・アーミッシュ」『結社の世界史5 クラブが創った国アメリカ』山川出版社、2005年、「改革派キリスト教徒の共同体」『北米の小さな博物館』彩流社、2006年、「アーミッシュのユートピア」『言語』4月号、大修館書店、2002年、「アーミッシュを訪ねて 歴史的背景と多様性」「信仰と家族・コミュニティ」「コミュニティの中の教育」「アーミッシュの食文化」「生活とアトキルトの世界」「現代社会とアーミッシュ」『言語』大修館書店、2003年、4-9月号